

震災の傷 モンゴルに癒やされた

母亡くした西宮の男性

草原の国へ恩返し

大草原が悲しみを癒やしてくれた。阪神・淡路大震災で母親を失った西宮の男性が、旅したモンゴルの文化や人々の暮らしに魅せられ、回国への支援活動が続いている。最近では被災した神戸・長田の靴メーカーも協力し、子どもたちに一千以上の運動靴を寄贈。同国政府から感謝状も届いた。「多くの人にモンゴルの文化に触れてほしい」と震災十年を前にした十六日、モンゴル音楽のミニコンサートも計画している。

(山本哲志)

モンゴルの子どもたちの支援を続ける市山さん。手にするのはモンゴル政府から送られた感謝状―西宮市北六甲台5



西宮市北六甲台五の団体職員、市山時彦さん(左)と靴メーカーのラッキーベル社。

市山さんは神戸市兵庫区の実家が全焼。母親当時「ミニ」を失った。落胆している市山さんを案じた知人がモンゴル旅行に誘ってくれた。

大草原で聞く馬頭琴の音色や遊牧民の自由な生活に「背負った重荷が下りた気がした」と市山さん。

次代を担う現地の子どもたちや若者への支援を新たな生きがいにしよ、と決意。長年働いた大手飲料メーカーを退社して休暇などが取りやすい現在の職場に転職、来日を望む若者の保証人になることや、学費支援などの活動を始めた。

二〇〇〇年にはモンゴ

子どもたちに靴贈る

16日に長田で
コンサート

ル支援の会「AMOS(アモス)」を発足。知人ら十数人と同国や中国・内モンゴル自治区への物資支援や留学生の世話を続けている。

モンゴルは一九九九年の大寒波以来、生活物資が不足気味で、都市部を離れると、はだして過ごす子どもも多い。震災で本社が全壊したラッキーベルが、神戸や世界各国に運動靴を贈っていることを知り、協力を求めた。寄贈は二〇〇三年に三百六十足、〇四年には八百六十足に上った。

コンサートは正午と午後一時の二回、神戸市長田区のシューズプラザで。無料。市山さんは「自分と同じように、いまだ心に傷を負う人たちの心を少しでも慰められれば」と話している。

刻む
10年